

はじめに

二〇〇三（平成一五）年から『医療科学通信』（医療科学社）に、「医療史跡」と題して医学の先人達の史跡を地域ごとにコラムとして紹介した。その後、二〇〇六（平成一八）年から『Isotope News』（日本アイソトープ協会）に連載し、国内の医療史跡を探訪してきた。

医療史跡の探訪は、墓巡りでもあった。偉人に類する人は、生誕地に顕彰碑があり、また墓所前にも記念碑などが建立されている。医療史跡探訪を墓巡りに終わらせず、先人は、どのような思いで立ち向かったのか、その想いを探って来た。偉人伝もなく、歴史の一ページに埋もれてしまふ一事例に過ぎないことも、振り返り、確かめてみると、そこには先人からの警句が残されていた。

日本の女医第一号の荻野吟子は、小説『花埋み』（渡辺淳一著）で有名だが、生誕地の埼玉県熊谷市に「生誕之地記念碑」が立ち、北海道せたな町には顕彰碑がある。また雑司ヶ谷霊園の墓の脇には、戯曲『紅燃えて』（佐々木武観^{たけみ}作）の像が建てられ花が絶えない。

一方、将軍吉宗の時代に施薬院の建設を上書し、小石川養生所に働いた小川箆船も山本周五郎しゅうせんの小説『赤ひげ診療譚』の主人公「赤ひげ」のモデルとしても知られているが、荻野吟子と同じ雑司ヶ谷霊園の区画にある「家族之墓」と刻まれた墓石にはひっそりと落ち葉が積もっている。

『Isotope News』の連載では、「大学構内に残る医療史跡」と題して探訪したが、気になることがあった。広々とした九州大学医学部キャンパスの中にある九州大学医学歴史館には一九四五（昭和二〇）年に九州帝国大学（現九州大学）の医学部で行われた、アメリカ軍捕虜に対する生体解剖実験の九州大学生体解剖事件の展示がないのである。同様に、二〇一四（平成二六）年に完成した京都大学医学部資料館でも、戦時中に同大学の医師が関与して細菌兵器を開発していた旧日本軍七三一部隊を説明する展示パネルが撤去されていた。

二〇一一（平成二三）年に第二八回医学会総会医学教育史展では『歴史でみる・日本の医師のつくり方』、二〇一五（平成二七）年の第二九回医学会総会二〇一五関西の医学史展では『命をまもる知のあゆみ 医は意なり』の図録が出版された。だが、その中にも医療者が関与した負の歴史が記されていない。

史実は、現代の目で批判的に読むことも必要だが、それよりも、それぞれの時代に置かれていた政治的、社会的、文化的な背景を理解し、その時代の人の目で読み解くとそうした史実の中に

息づくものが見えてくる。陽の当たる歴史だけでなく、陰ともいえる歴史を後世に残すことも教育機関や行政の使命ではないだろうか。

「歴史でみる・日本の医師のつくり方」の図録に多数掲載されている陸上自衛隊衛生学校医学科情報史料室「彰古館」の見学は、事前に「見学申込書」の提出が必要で、また館内展示品の写真撮影は許可されない。東京大学の「健康と医学の博物館」所蔵資料や、日本大学図書館にある古医学資料なども、医史学研究者ではない者には閲覧するハードルが高い。そのため本書で探訪した医療史跡は、屋外の展示や顕彰碑、墓石が多くなった。

二〇二三（令和五）年の第三二回日本医学会総会のバーチャル医学史展は、順天堂大学本郷キャンパスにある日本医学教育歴史館をウェブサイトで閲覧するものであったが、やはり博物館等で古色蒼然とした歴史の実物を見たいと思う。